相談室便り　６月号

保護者　様

令和３年６月
堀江中学校　相 談 室

『 ” 考えて ” います 』

私共カウンセラーは、当然ながらたくさんの生徒たちと会話をします。担任の先生から面接依頼を受ける子、突然連れられて来る子、自ら予約を取って来る子、などなどカウンセラーが生徒たちと話をする形態は様々です。いずれの場合も生徒たちはそれぞれ、悲しみや、怒りや、焦りや、諦めや、苛立ちや、その他の感情を含むドヨンとした気持ちを抱えて相談室の椅子に座るのです。

最近の傾向として、友人関係の相談と肩を並べて多いのが家族に関する相談です。彼らの話を傾聴していくと、子どもは子の立場で、親は親の立場で、両者それぞれ苦しんでいる様子がうかがえます。親は子に対して決して理不尽な要求はしておらず、ただただ健康的な中学校生活を送って欲しいと願っているだけなのですが、一方で子どもは、自分の個性ややり方を認めてもらえないと感じる場面もあってか、親の愛を素直に理解できない（したくない）ときもあるのでしょう。多感なこの年齢の我が子と接するのは本当に骨の折れることですね。

ここで私は、保護者の皆さんにお伝えしたいことが１つあります。それは、子どもたちは一生懸命に ” 考えています ” ということです。

私が生徒たちと話をしていて、しばしば彼らの真面目さに驚かされます。失敗への振り返りや、次の対策や作戦を、たった独りで練っている様子が会話の中からうかがえます。例えば家庭では、親子喧嘩の果てに数日間絶交状態が続いたとしても、子どもたちは決して投げやりになっている訳ではなく、考えています。次の手を考えています。

保護者の皆さんには見えない、学校で放つ彼らの試行錯誤と決意の姿勢は二重丸三重丸です（お見せできないのが残念です）。その姿を脳裏に描き、我が子の力を信じて伴走してみるのも、子育ての醍醐味ではないでしょうか。我々は、家族とは違う側面から生徒を全力で支えます。